

アイスクリーム・ドリーム

岩瀬成子 *Johko Iwase*

長谷川集平 *Shuhei Hasegawa*





メルヘン共和国
アイスクリーム・ドリーム

NDC913
四六変型判 20cm 158p
1991年2月初版
ISBN4-652-07212-0

作者 岩瀬成子
画家 長谷川集平
発行 株式会社 理論社
発行者 鈴木良司
〒162 東京都新宿区若松町15-6
電話 営業 (03) 3203-5791
出版 (03) 3203-5794

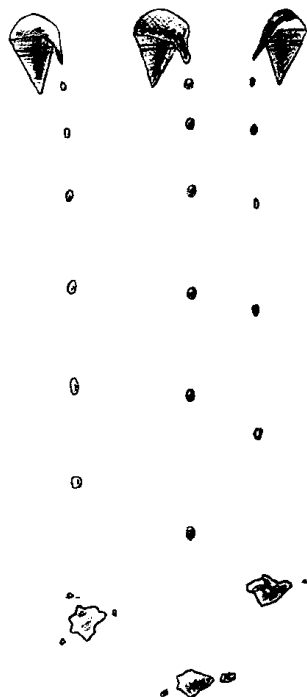
1991年2月第1刷発行

メルヘン共和国

アイ

ム

目次



105	猫の家
53	旅
5	アイスクリーム・ドリーム

illustration

SHUHEI HASEGAWA

art direction **TAKAHIRO EGUCHI**
cover photo **AOI TSUTSUMI (Photo Staff Blue)**
design **OFFICE T.BREAK**
symbol illustration **MITSUMASA SAITOH**
art frame coordination **YUZUKA YOKOYAMA (FACTORY "KOBITO-NO-KUTSU")**

アイスクリーム・ドリーム

1

溶けたストロベリー・アイスクリームのしずくが、ほんとと白いスカートに落ちて、じわつとにじんでいくのを、わたしはじつと見ていた。

「悪くないね」

と、アイスクリームをなめた口で圭太くんが言った。

「でも、ちよつとね……」

わたしが言いかけると、

「本物の味じゃないなんて言うなよな、うちのママみたいに」

と、圭太くんは言った。

わたしは、手の中で溶けかけているアイスクリームを急いでなめた。

アイスクリームを食べ終わると圭太くんは、手下げ袋からハンカチを取り出し、口のまわりを拭いた。KEITAと、黄色い糸で縫い取りのしてある袋は、圭太くんのお母さんのお手製らしかった。圭太くんのお母さんは器用で、なんでもできる。「もう、主婦の鏡みたいな人なんだから、負けちゃうよ」と、母も言っている。

圭太くんのはいているズボンもお手製なら、圭太くんの髪も圭太くんのお母さんが刈っているらしかった。レモン・パイを作れば、それこそ玄人（ふうと）はだしだし、梅干しも漬けるし、果実酒も作っていた。ギョウザの皮だって何だって全部手づくりなのだ。花を育てるのもうまかった。圭太くんのうちは、どの部屋もお花屋

さんのショーウィンドーみたいに観葉植物や、季節の花が一杯並べてあった。

母もそんな圭太くんのお母さんに影響されてか、この頃ではパン作りに凝りはじめている。「外でへんなものを買って食べたりしないでよ。添加物のかたまりみたいなものなんだから」なんてことも言いはじめた。

「気になるの？」

圭太くんは、わたしのスカートにできたピンク色のしみを見つけて尋いた。

「ううん」

わたしは首を振り、残りのアイスクリームを食べた。

ほんとうは気になっていた。しみがどんどん大きくなっていくようで、とても気になっていた。これだと、アイスクリームを食べたことが一目ではばれてしまうだろう。そうになると、アイスクリームをどこで食べたかを尋ねられ、誰と食べた

かも母は知りたがるだろう。そして、とうとう何もかもを洗いざらい喋らされてしまふのだ。それが怖かった。

毎週、ピアノ教室の帰りに圭太くんと二人でアイスクリーム・ショップに寄り道していた。しかもその代金は、いつもわたしが払っている。そしてそのお金はといえば、ピアノ教室の月謝袋から抜きとったものだった。さらに、とうとう今日はピアノ教室をさぼって、いきなりアイスクリーム・ショップに来てしまったのだ。

これだけのことを、どううまく言い訳することが出来るだろう。わたしのせいじゃなくて、どうしようもなくこうなってしまったんだみたいに、うまく母を説得することが出来るだろうか。ピアノなんでもともと好きじゃなかったんだ、なんてことをいまさら言ってみたって、かえって逆効果で、言い訳にも何もなりは

しないだろう。

圭太くんは幼稚園のときからピアノを習っていた。わたしが始めたのは二年ほど前、三年生になってからだだったが、わたしの望みは、はっきり言ってしまうと、ピアノ発表会の時に、圭太くんと二人で連弾をすることだった。圭太くんがピアノを弾く姿は、背筋をすっと伸ばし、とても美しかった。

二年前、圭太くんがピアノ発表会の招待券をくれ、そのとき初めて、圭太くんがピアノを弾く姿を見た。圭太くんはブルーのスーツを着込み、髪をこつてり固めてステージに出てきた。聴衆に軽く会釈をし、落ち着いた様子でピアノに向かった。その姿が忘れられなかった。

今から始めても遅すぎやしませんか、と尋ねると、ピアノの先生は「だいじょうぶ、誰でも努力しだいで上手くなれます」と愛想よくむかえ入れてくれたけれ

ど、いざ始めてみると、なかなか上達しなかった。

圭太くんにしても、大して上手な方ではないということがすぐにわかった。まるつきり下手というわけでもなかったが、つまり目立たない、その他大勢の一人にすぎなかった。発表会では、いちおう聴きばえのする曲を弾かされていたから、ちよつと聴いただけではわからなかったけれど、五年も六年も続けている他の生徒に較べると、圭太くんのレベルは小学低学年といったところだった。わたしにしても、家で練習していたのは最初のうちだけで、この頃ではピアノのふたさえ開けなかった。

だけど、圭太くんはそんなことはちつとも気にしてはいないようだった。

「おれ、もともとピアノの才能があると思ってないしね。ピアノなんて、誰でも上手くなるもんじゃないよ」

と、まるでこたわらなかつた。

「でも、努力とか、そういうこともしなきゃ」

「しなきゃどうなるんだよ」

「おとなになったときのことを考えるとね」

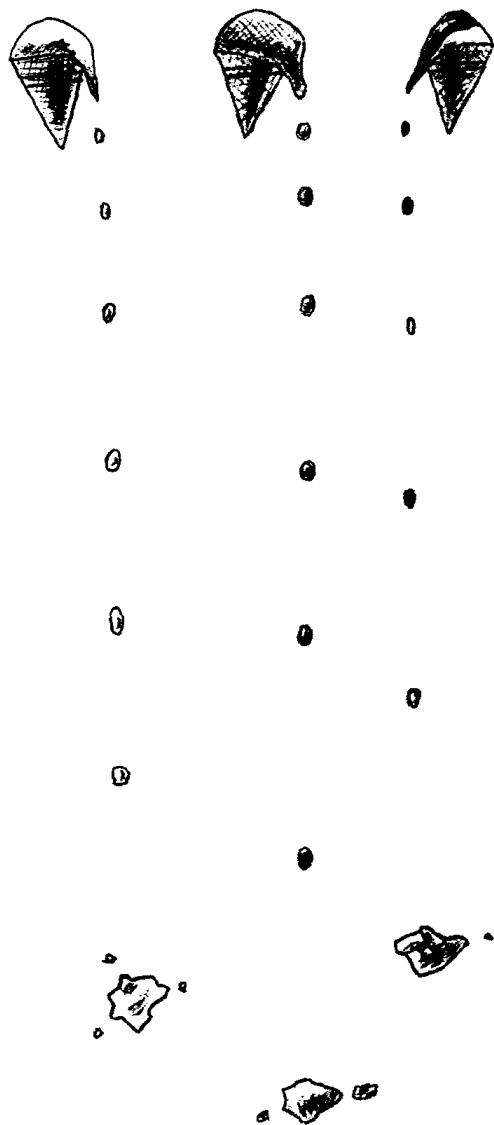
わたしは、ちよつと考え深そうに言つた。

「未来のこと？　ぼくたちの未来か？　そんなの、あてにならないって。努力とかそういうこととは関係ないんじゃないの」

「でも…」

わたしには、やっぱり少しは上手になりたい気持ちもあつた。

五年生にもなつて、幼稚園の子が弾くような曲ばかり弾いてるんじゃないか、めだなどという気もしていた。だからピアノ発表会するとき、人前で演奏することになる



と、どうしても顔がこわばった。この前の発表会の写真を見ると、わたしはピアノの前で首を突き出し、どれも怒ったような顔をしている。

「まだお金ある？」

圭太くんが尋いた。

「少しなら」

と、わたしは答えた。

「でも、やつぱり来週にしようか。今日はもう二種類食べちゃったし」

圭太くんは、ケースの中のアイスクリームをひとわたり見て歩いたあと、ようやく決心したように、でもやつぱり食べたそうな顔をして言った。

財布の中にはあと二千円残っていた。だが、あと二十種類はあるアイスクリームを全部二人で食べるとしたら、これではとても足りない。来月分の小遣いをま

わしてもまだ足りない。来月分のピアノ教室の月謝にも手をつけなければならなくなるだろう。

かなり悪いことをしているはずなのに、なぜかわたしには良心が痛むとか、そんな気持ちはわいてこなかった。先のことは考えないようにしていた。いやな事が起こるとしても、それはまだずっと先のことだ。そう思っていた。

小遣い帳にも、でたらめばかり記入していた。月末には母がチェックするから、なんとか収支のつじつまを合わせなければならなかったが、それは難しいことではなかった。買いもしない文房具や、ありもしないクラスメートの誕生日のプレゼント、切手やはがきを買ったことにすればいいだけだった。

そんなことも、やってみるとそんなに悪いことだという気はしなかった。